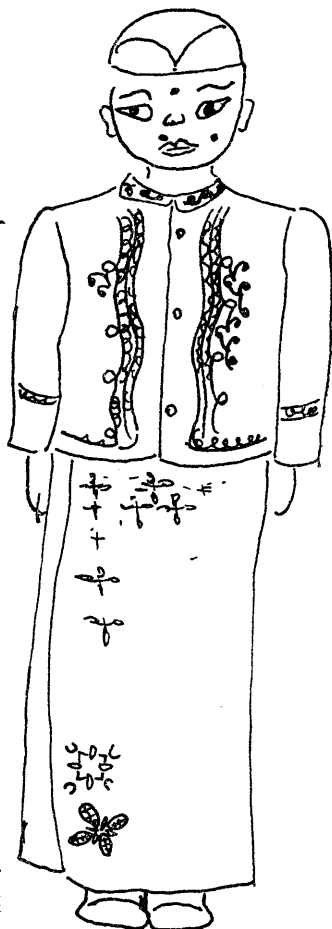


# 「インドネシアの子どもたち」

——アウグス・サンタナとソニイ・ウタマ——

近藤 伊津子



スンダ族の正装

Augus Santana

もはや一昨年の夏のこと、インドネシア国のバンドン市の郊外に出かけた私と娘は、チュル・ダゴに迷い込んだ。

「ダゴ！」という終点を呼ぶ声でビス（小型乗合バス）から降され、あてのない遠足をどこから始めてよいのか一瞬戸惑いながら、下りになっている沢道に向った。すでに、抜けるような青空がはるかに高い、椰子林の中に踏み込んでしまった。田の畔のように細い道を、草の中

に潜んでいそうな蛇を気にしながら歩いた。椰子林を過ぎると、田には青々と稲穂がたゆとうていた。次々と名も知らぬ作物の畑を過ぎ、赤土に少しばかりの石の混った崖のような坂道の下にきた。一步、登る度に滑り落ちるのを娘と掛声を出し、十メートルも登ったところは峠になっていた。噴き出る汗をぬぐっていると、大きな竹の籠を持ったおかみさんがやって来た。市場への買出しの帰りと見えた。

「スラマツト・シアン」と挨拶する。娘と折っては口に運んでいたチョコレートを差し出すと、一かけ取り、自分も買物籠から、おこしのような菓子を食べるよう出してくれた。

それから、娘に「ウムルニヤ？（年齢は）」「ナマニヤ？（名前は）」と尋ね、「S・D4クラス（小学校4年生）」であることを確かめる。そこで一息ついて、娘を可愛い、とほめてくれた。

次に、私の方の戸籍調べがあり、ここに何をしに来たのかと聞かれ、ジャラン・ジャラン（散歩）に来たけれ

ども、ここが、どこなのかわからない、と言うと大笑いとなった。

井戸端会議を峠でしていると、登って来た道よりはるか向うの村の方から、スピーカーで、ダラン（ワヤン——人形劇の口演者）らしい語り口の声が聞えて来た。すると、おかみさんは、しきりと説明を始めたが、さっぱりわからない。ともかく、一緒に行こうということだけがわかり、ずるずるとすべり下り、声のする方へ向った。

やがて、轟音と共に、流れの急な、大きな川のたもとに到り、竹の腰掛に一と休みしていると男がやって来た。このおかみさんの夫という。

ここは、チュル・ダゴであること、チュルとは川のことという。川のほとりの村とでも言うのだろう。

私たちの来た道のむこうから、四人の女づれがやって来た。老婆はブルーのベールを被り、五、六歳の女の子と、その母とか叔母らしい女たちは白いベール。ゆつたりと長い腰衣をつけていた。手には、手さげ袋と、サン

ダルを持ち、足は跣であった。

気付いてみると、あちらこちらから、そういう出立ちの女子ども、男たちが、こちらにやって来る。

やっと、これは、何かの祭事に招かれた人々であることがわかって来た。

もう一度、私も行ってよいものか、おかみさんの夫にたずねて、彼らの後から、ついて行った。

川を渡ってから、ゆるい登り坂のところどころに石段のある幅、半間ほどの道は、南斜面の村落に入っていた。

坂道には、手押車に、色鮮やかなペロペロキャンデー、ふくらますと風船がピーと鳴る竹笛、新聞紙の張子のお面は、真赤に塗り上げ、金色で虎になっている。おでんのような竹ぐしの煮つけ——子ども相手に、狭しと店を張っていた。

突然、ダランらしき声が大きくとびこんで来たと思うと、目の前の農家の庭に、五、六十人の人々が屯しているのが見えた。

薄いピンクの外壁の農家の庭先には、相撲の土俵より一回り広い、青竹の舞台が、地上一メートルほどの高さでしつらえてあり、天井は、高く竹の棧にテントが張られていた。

舞台には胴長の太鼓と他にもいくつかのガムランの打楽器があり、それぞれの奏者と、中央には、太い声の男が、マイクを二つ持って、しきりと、しゃべり、庭の人々はそれに合わせてさんざめく。

太鼓の音に乗って、「空手」の技を若い男が始めた。「ジュパン・スモウ」と先程の男が言う。

カギ型の母屋と舞台の間の庭には、スチールの椅子が四・五十客も並び、テントも張ってある。

スンダ族の正装（赤いベルベットの短い上着には金モールのみ飾りがあり、茶色の細かい柄のパテックの腰衣と、帽子）をした幼い美少年は、うつすらと紅をさし、アイシャドーで一層大きな瞳が切れ長に見える。そして同じ服装で、父親にだかれ、泣きべそをかいている

もつと幼い少年。

この農家のこの二人の少年たちが、本日の主人公であることが、わかつて来た。

この家のまだ若い主人夫婦のところへ、つれていかれ、先程のおかみさんの夫の紹介があり、飛び入りの客となった。

母屋の庭につき出ている方の広間に案内された。そこは、とき出しの床に何枚かのじゅうたんが寄せ敷きされ、出入口とは反対の南側に、キャンディー、クッキーなどが、菓子屋の店先のように、ガラスの瓶につめられ、整然と並び、瓶の間、間にコーラ、ファンタがはさまれている。その前に、照りのある、鶏の丸焼きが、頭も足も付いたまま、きれいな色紙で飾りつけて置かれている。その他、名も知らぬ菓子らしきものが、たくさんあった。食物の右横には、一・五メートルもありそうなおツリーが、果物・花・木の葉などでゼいたくに飾りつけられていた。壁にも、縦一・五メートルほどの濃紺地に草花を張り付けたのれんのようなものがあつた。(どちら

も、デコラシー・ダリジャヌールという)

招かれた女たちと幼い子どもたちは、この広間の床にすわり、男たちは外に、子どもたちは坂道の方へはみ出して、屋台の店をとりまいている。

この広間に座ると、すぐに女の客たちからは質問となった。

娘に名前、年齢、学年と聞き出し、かわいい子だとはめる。娘は私の背にかくれ顔だけ出していたが、次第に出て来て、遂に外にとび出し、屋台のまわりの子どもたちと遊びはじめた。ピーと鳴る笛を買ってゴム風船が、じきに破れたと持つて来た。

この日、二度もあつたことだが、全く知らない者どうしの「あちら側」と「私」とを、結び、一挙に融和させてしまう「子ども」(私の娘)の、媒体としての作用を、この時ほど、ありがたく、又、興味深く思ったことはない。

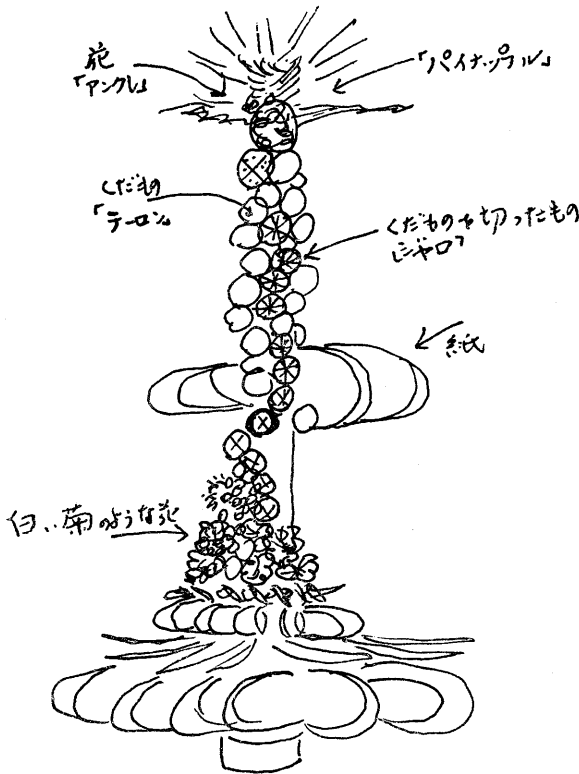
大勢の見知らぬ異国人の中に、突然舞い込み、格別違

和感も無く、その一座に身を置いておくことの不思議さ。

日常的にも、例えばバス停で、ふとしたことで、子づれの大人と、バスを待つ間にその子どもにも名前や年齢を尋ねることで気持がほぐれ、見知らぬ者どうしがほんのひととき言葉を交わす、ということは、しばしばだしも体験することである。

これは日常の中で、何げなく交わされているが故に、意識上に浮上することもない。

この日、「私」は、「子ども」に附随している大きい人であって、「子ども」を連れている「私」ではなかったのではなからう



デコラシー・ダグリジャヌール

か。

どこからともなく現われた見知らぬ人、それが小さい人、子どもである時、侵入者から来訪者に転じるのではなからうか。

インドネシアの農村地帯では、今もって子だくさんで

五人は普通である。

これは殆んど自然の摂理にまかせて、産み続けていると見てもよいかもしれない。年齢よりはるかに老けている女たちを見ると、そう頷ける。

産んだ子どもは、もっと多いとすると、まさに可能な限りの出産であろう。

これにはさまざまな背景があるにせよ、「子ども」は見知らぬところからの突然の来訪者として迎えられているのではなからうか。さらに、その原体験は、他者の子どもをも受け入れ易いものに行っているのではないだろうか。

さて、広間の私は、この日がいかなる祭事であるのかわかっていないと気付いた中年の女の客が、主人公である少年を指さし、股間に左手をもって行き、右手をささみにして切る仕種をしたことで、やっとわかった。

この家の八歳と二歳の少年の「割礼」の祝祭の日なのである。二歳の弟は痛みで泣いているのだ。兄は健気に

も、平静を保っている。

「割礼は古代エジプトの壁画にも見られ、古くから世界の各地で行われていた。

イスラム教徒は、アッラーの神との「契約」の証として、又イスラム教徒共同体への所属のしるしとして割礼をする」(『平凡社大百科事典』による)

少年はペニスの包皮環状切除によって、消し去ることの出来ない傷跡を身体に刻みつけムスリム(註)になったのである。

しかし、インドネシアに於てはイスラム教(註)の厳格さはかなり薄らぎ、農村に於いては土俗的宗教と混り入っているといわれる。つまり宗教的統合の意味深さより、来訪者としての「子ども」が、この地の「むら」の一人として定着し、未長く留ることを祈願する儀礼ではなからうか。

七才前後が多いことから、誕生からその年齢の頃ま

では、いつ、見知らぬところへ立ち去るや定まらぬ来訪者であるのだ。

村を挙げて、親類縁者を招く大がかりの祝祭は、「子ども」の「むら」における重大な役割を示し、一方、親を含めた「むら」人の深い安堵の喜びの現れであろうか。

何時なんどきになつたのだろうか。私の前には、めずらしい菓子が次々に出され、やがて、母屋の奥の方へ案内された。長いテーブルの上には大皿に盛り付けた料理が、白いごはんの器の順から並び置かれ、一枚の皿に各自適当に装いそれを持ち、竹の舞台の正面の部屋に移動した。そこには甘いティー（紅茶）が用意されていた。

今宵は夜が白む頃までワヤンの精霊たちがこの村を駆けめぐり、「子ども」たちは舞台の上で、あるいは前の席の上に長くなり夢現に、精霊たちと語らうのだ。

外はかすかに陰りはじめた。

娘と附随者の私は、奇しくもこの日、二人の少年たち

ちと共に来訪者となつたが、この「むら」に留めることは出来なかつた。

アウグス・サンタナとソニイ・ウタマの兄弟二人は、まずれもなく定着し、留つた。

(注1) イスラム教徒

(注2) インドネシアは85%の国民がイスラム教徒である。国教でもある。

(かつこう文庫主宰)